

## 『文選』李善注考 — 釈義の注について —

富 永 一 登

『太平広記』卷四四七（狐二）に、張鷟の『朝野僉載』から採録した、次のような話が記されている。

唐國子監助教張簡、河南緱氏人也。曾爲鄉學講文選。有野狐假簡形、講一紙書而去。須臾簡至、弟子怪問之。簡異曰、前來者、必野狐也。（唐の國子監助教の張簡は、河南緱氏の人なり。曾て郷学の爲に文選を講ず。野狐有り簡の形を仮り、一紙書を講じて去る。須臾にして簡至る。弟子怪しみて之を問ふ。簡異しみて曰く、「前に来りし者は、必ず野狐なり」と。）

張鷟は、則天武后のころから玄宗の前期までの人で、このころには狐までも『文選』を講ずる話が、語られていたことがわかり、初唐から盛唐にかけての『文選』の流行ぶりが窺える。李善が姚州流罪から帰還後、卒するまでの十八年間、官職につかず、『文選』を教授するだけで生活できたのも、集まった受講生の数が相当数にのぼっていたからであろう。

盛唐の詩人杜甫が、『文選』を自家案籠中の物としていたことは、よく知られている。<sup>②</sup> また、錢鍾書『管錐編』（第4冊一四〇〇頁）にも、『文選』が唐代になって必読文献になったことを記し、敦煌出土「秋胡變文」（『敦煌變文集』卷二）中に士大夫の子弟が学問するのに必要な文献として「孝経・論語・尚書・左伝・公羊・穀梁・毛詩・礼記・莊子・文選」が挙げられていることを証左としている。中唐の韓愈も、「中大夫陝府左司馬李公墓誌銘」で、李

荊の勉学ぶりについて、「年十四五、能闇記論語・尚書・毛詩・左氏・文選、凡百餘萬言。（年十四、五にして、能く論語・尚書・毛詩・左氏・文選、凡そ百余万言を闇記す。）」と記しており、経書とともに『文選』も暗記すべき必読文献となっていたことがわかる。

『文選』所収の五百篇ばかりの作品は、美的言語表現の結晶であり、詩人たちが如何にして言葉を練り上げていたかを知るには恰好のものであった。駢文の才に長けた李善は、それに気付いて『文選』に最も相応しい注釈を施そうとしたと思われる。李善注の特徴は、「作者必ず祖述する所有るを示す」という方針に基づく引証による注釈であり、千九百余種の文献・作品を約四万箇所にわたって引用している。この注釈方法は、従来の訓詁・論証を中心とする注釈学史上において画期的なものであり、古典を典拠とする言語表現に心を砕いた六朝駢儷文が大半を占める『文選』の注としては最も適切な方法であった。

一方、李善の注には、引書引文だけではなく釈義の注も相当数見られる。そこで、本論では、釈義の注の内容を分析して李善注の特質を把握する一助にしたいと思う。なお、李善は引書引文によっても正文の意味を解釈する釈義を行っているのであるが、以下は引書引文によらない注文のみを釈義の注として扱う。

### 李善注の注釈義例—釈義の注—

李善注の注釈義例については、清・張雲璈『選学膠言』の「注例」や、錢泰吉『曝書雜記』の「文選注義例」に始まり、高步瀛「李注略例」（駱鴻凱『文選学』に引用するが未見）、駱鴻凱『文選学』—源流第三—（『制言半月刊』八、九、一〇期、一九三六年初出）、李審言「李善文選注例」（『制言半月刊』五〇期、一九三九年）に見られるが、皆李善自身が注釈中の随所に記している二十三条の自述注例を取り上げて解説したものである。これに對して、斯波六郎博士は、「李善文選注引文義例考」（『日本中国学会報』第二集、一九五一年）において、李善注全体を検討され

た上で、李善が立てていたであろうと思われる詳細な引書引文義例を推定されている。その後にも、李維棻「文選李注纂例」(『大陸雜誌』一二一七、一九五六年)、王札卿「選注釈例」(『幼獅學誌』七一六、一九六八年)、黃永武「昭明文選李善注摘例」(『昭明文選論文集』木鐸出版、一九七六年)、趙振鐸「訓詁學史略」一第三編第十一章文選李善注一(中州古籍出版社、一九八八年)などの『文選』李善注の注釈義例に関する論考が出されている。中でも、趙振鐸氏の著書は、李善の注が言語表現の継承と発展を明らかにしていることを指摘しており、啓発される点が多い。

ただ、これらの中では、李維棻「文選李注纂例」に、「言」「喩」「謂」「猶」「故曰」などの義例が挙げてあるだけで、釈義の注という観点で考察したものは見当たらない。そこで以下、引書引文の注との関連も視野に入れつつ釈義の注の義例を示してみたい。

なおその際、唐写永隆本・集注本などの抄本と板本との異同、板本間における異同を考慮しなければならない。というのは、引書引文の注の場合と同様に、次のような事例が散見するからである。以下の挙例は、胡刻本を底本とする。

○卷二、張衡「西京賦」の「收禽舉齒」の注(22a)

齒、死禽獸將腐之名也。善曰、齒、取肉名、不論腐敗也。(茶陵本・四部叢刊本取作聚。尤本・袁本・朝鮮本与胡刻本同。)

狩りで得た禽獣の肉を集めて並べる「禽を収め齒を挙げ」という描写の注である。薛綜は「齒」字の意味を「死せる禽獣の將に腐らんとするの名なり」と、腐りかけた肉の意に解するのに対して、李善は腐敗の意味はないと指摘している。ただ、「善曰」以下の十一字は、永隆本には無い。これについて、高步瀛(『文選李注義疏』)は、「案ずるに此れ薛注の將に腐らんとするの説を正す。李注当に有るべし」という。

○卷二、張衡「西京賦」の「皇恩溥、洪德施」の注(22 b)

善曰、……皇、皇帝。普、博施也。

天子の恩徳があまなくゆきわたることを述べた「皇恩溥く、洪德施す」という句の注である。<sup>③</sup>この李善注は、尤本・胡刻本以外の板本には無く、胡氏考異には「尤」後脩改して注の七字を添入す。……其の注の七字、未だ何より出づるかを審らかにせざるなり」といい、梁氏旁証にも「其の注の七字、乃ち尤本の添ふる所にして、何の所より出づるかを知らず。且つ正文溥、注普に作るも、亦誤り有るに似たり」という。いずれも尤本による李善注の増補と考えるが、永隆本の薛綜注に「皇、皇帝也。普博」とあるので、これが板本になる段階で李善注に混入したとみなした方がよい。もともと李善注本が、永隆本のように前後の句と分けて「皇恩溥、洪德施」二句のみに薛綜注を付けていた(李善注は無い)のを、板本がこの二句を上二句と併せて注を施す形にしたので、その際に混入したのである。また、永隆本のこの二句には李善注がないので、九条本の旁記などのように、正文の「皇恩溥、洪德施」二句を脱した李善注本が存在していたというのも、この注釈形式の変更に起因して生じたものと思われる。

○卷三〇、盧諶「時興」の「澹乎至人心、恬然存玄漠」の注

言已澹乎同彼至人、意存玄漠而已。(3 a)

これは、季節の変化に動じない至人の心境をいう「澹たり至人の心、恬然として玄漠を存す」の句意を説明した釈義の注であり、各板本にはあるが、集注本(巻59下3 b)には無い。これについて、森野繁夫先生は、「正文の釈義」「言うところは已に澹として彼の至人に同じく、意は玄漠に存するのみ」とは、自分の心が至人のごとくであると解するわけであり、李善の解釈とも思われない。後人が付加したものであろう」と指摘される<sup>④</sup>。

○卷三〇、陶潜「雜詩」(其二)の「嘯傲東軒下、聊復得此生」の注(3 b)

郭璞遊仙詩曰、嘯傲遺俗羅得此生。劉瓛易注曰、自無出有曰生。生得性之始也。

各板本は、「嘯傲遺俗羅得此生」八字を郭璞「遊仙詩」としていて、上海古籍出版社の点校本（一九八六年）も、「嘯傲遺俗、羅得此生」と断句する。しかし、集注本には、この下に「謂自得於此一生也」の八字があるので、「嘯傲遺俗羅」五字が正文「嘯傲」の注としての郭璞「遊仙詩」の引用であり、「得此生謂自得於此一生也」（此の生を得とは、此の一生に自得するを謂ふなり）十一字が李善の釈義の注とするのが正しい。李善は、正文の「得此生」を釈義した後で、劉瓛の『易注』の「無より有を出だすを生と曰ふ」を引いて「生」に注しているのである。因みに、この郭璞の「遊仙詩」は、『初学記』卷三三に引かれており、「嘯傲遺俗羅、縦情在獨往」（嘯傲して世の羅を遺れ、情を縦にして独往に在り）となっている。また、「生得性之始也」（生は性を得るの始めなり）の六字は、板本にあるだけで集注本には無い。この劉瓛『易注』は、卷六「魏都賦」の「生生之所常厚」注にも引用されているが、それも「自無出有曰生」の六字だけであるので、これは後人によって増補された釈義である可能性が高い。

○卷三〇、陶潜「詠貧士詩」の（一）「孤雲獨無依」の注、（二）「衆鳥相與飛」の注、（三）「遲遲出林翮、未夕復來歸」の注

（一）孤雲、喻貧士也。（二）喻衆人也。（三）亦喻貧士。

いずれも比喻を指摘する釈義の注であるが、皆集注本には無い。（一）は、集注本・板本ともに五臣の李周翰注に「蓋以喻貧士」という同様な注がある。集注本の通例として、李善注や「鈔」に同じ記載がある時は、五臣注の方を省略するので、この李善注は集注本編纂時には無かったと考えられる。（二）も、五臣の張銑注に「喻衆人各有所營也」とある。（三）は、「鈔」に「喻貧士也」とある。「鈔」は李善注をもとにした注釈であるので、李善注と同じ注は施さない。これは「鈔」の注文が板本において李善注に混入したものであろう。

以上のような李善自身の或いは後人の増補と思われる注に対する配慮を必要とするために、本稿では、永隆本・集注本の残っている卷によって義例を立て、それを他の卷に及ぼすという方法によって考察する。その上で、永隆本・

集注本によって確認ができない釈義の注が、もし仮に後人の増補だとしても、それが李善注の体系にそうものであれば、李善の意を体した注釈として、李善の『文選』解釈を検討する資料として差し支えないと考える。

〈字義の解釈〉

○卷二、張衡「西京賦」の「浸石菌於重涯」の注(12 a)

菌、芝屬也。(永隆本無也字。)

○卷二八、謝朓「鼓吹曲」の「凝笳翼高蓋」の注(24 b)

徐引聲謂之凝。(集注本卷五六28 b)

○卷三〇、謝靈運「南樓中望所遲客」の「臨江遲來客」の注(6 b)

遲、猶思也。(集注本卷五九上18 b)

○卷三〇、謝朓「和伏武昌登孫權故城」の「參差世祀忽」の注(16 a)

忽、謂忽忽然而去也。(集注本卷五九下19 a)

○卷三四、曹植「七啓」の「寒芳苓巢龜」の注(16 a)

寒、今臍肉也。(集注本卷六八12 a)

○卷三四、曹植「七啓」の「忽躡景而輕霄」の注(18 b)

景、日景也。躡之言、疾也。(集注本卷六八22 a)

○卷三四、曹植「七啓」の「熙天曜日」の注(20 a)

熙、光也。(集注本卷六八31 a)

いずれも他の注釈書に見られる字義の解釈の形式と同様なものである。

〈二字の言葉の解釈〉

この例が最も多く、次のように分類できる。

（ア）単に言葉の意味を解釈するもの、典拠のない言葉の注。

○卷二、張衡「西京賦」の「神山峨峨」の注（11 b）

峨峨、高大也。（板本は薛綜の注とするが、永隆本は「臣善曰」の下にこの注がある。）

○卷二八、鮑照「苦熱行」の「吹蠱痛行暉」の注（21 a）

行暉、行旅之光暉也。（集注本卷五六15 a）

○卷三〇、謝朓「始出尚書省」の「衰柳尚沈沈」の注（13 a）

沈沈、茂盛之貌也。（集注本卷五九下6 a）

○卷三〇、謝朓「觀朝雨」の「動息無兼遂」の注（14 a）

動息、猶出處。（集注本卷五九下11 a。處下有也字。）

（イ）正文の意に即して解釈するもの

○卷三〇、謝靈運「南樓中望所遲客」の「卽事怨睽攜」の注（6 b）

卽事、此離別之意也。（集注本卷五九上19 b。意作事。）

○卷三〇、謝朓「始出尚書省」の「既秉丹石心」の注（13 a）

丹石、言不移也。（集注本卷五九下6 b）

この後に、「呂氏春秋曰、石可破、而不可奪其堅。丹可磨、而不可奪其赤」と、『呂氏春秋』季冬紀誠廉篇を引証として挙げている。このように、正文の意味を説明した後で引書引文を行うのは、斯波六郎博士が「李善文選注引文義例考」で「（二）釈義（1）語義を解く為の引文（イ）先づ正文中の語の意義を解いて、然る後その語の用例を示す場合がある」といわれるものの一つとも考えられる。

○卷三一、江淹「雜體詩」の(郭璞)「海濱饒奇石」(19 a)

海濱、卽海中三山也。(集注本卷六二14 a)

典拠は示さず、この詩中での意味を説明している。

(ウ) 指示内容を明らかにするもの

○卷二、張衡「西京賦」の「若其五縣遊麗辯論之士」の注(14 b)

五縣、謂長陵、安陵、陽陵、茂陵、平陵。(胡刻本謂下有五陵也三字、茂作武。今従永隆本改。)

○卷二四、曹植「贈徐幹」の「顧念蓬室士」の注(2 a)

蓬室士、謂徐幹也。(集注本卷四七3 b)

この後に、「列子曰、北宮子庇其蓬室、若廣廈之蔭」と、『列子』力命篇を引証として挙げる。

○卷三〇、謝惠連「擣衣」の「君子行未歸」の注(6 a)

君子、謂夫也。(集注本卷五九上17 b)

この後に、「毛詩曰、未見君子」と、『毛詩』(周南汝墳など六篇に見える)を引証として挙げる。

○卷三〇、謝朓「始出尚書省」の「惟昔逢休明」の注(11 b)

休明、謂齊武皇帝也。(集注本卷五九下1 a)

この後に、「左氏傳曰、王孫滿曰、德之休明」と、『左氏伝』宣公三年を引証として挙げている。

○卷三〇、謝朓「和伏武昌登孫權故城」の「幽客滯江臯」の注(16 b)

幽客、眺自謂也。(集注本卷五九下20 b)

このほか、二字の言葉に対する釈義の注には、引書引文による場合との使い分けがなされているものがある。たとえば、「倒景」の語がそれである。



○卷七、揚雄「甘泉賦」の「歷倒景而絕飛梁兮」の注（5b）

張揖曰、陵陽子明經曰、倒景氣、去地四千里、其景皆倒在下。如淳郊祀志注曰、在日月之上、日月返從下照、故其景倒。

○卷一五、張衡「思立賦」の「貫倒景而高」の注（18a）

陵陽明經曰、倒景氣、去地四千里、其景皆倒在下。

○卷二二、沈約「遊沈道士館」の「一舉陵倒景」の注（24b）

漢書、谷永曰、及言世有仙人服食不終之藥、遙興輕舉、登遐倒景。如淳曰、在日月之上、日月反從下照、故其景倒。

○卷三五、張協「七命」の「承景倒而開軒」の注（5b）

陵陽子明經曰、倒景氣、去地四千里、其景皆倒在下。

以上の四例は、日月より高いところにある世界を意味する「倒景」であり、その場合は、李善は、「陵陽子明經」と「漢書」郊祀志及び如淳注を引用する。これに対して、以下二例の山が水面に映った景色を意味する場合は釈義の注を使いその用例を挙げている。

○卷一一、孫綽「遊天台山賦」の「或倒景於重溟」の注（4b）

山臨水而影倒、故曰倒景也。

○卷二二、謝靈運「從游京口北固山記」の「張組眺倒景」の注（9a）

遊天台山賦曰、或倒景於重溟。王彪之遊仙詩曰、遠遊絕塵霧、輕舉觀滄溟。蓬萊陰倒景、昆侖臺曾城。並以山臨水而影倒、謂之倒景。

この後者の例は、趙振鐸氏によれば、魏晉以来登場した山水表現であり、李善注によってそれが明らかにされている。

るという。この点は文学言語の発展過程を考える上で実に興味深いので、稿を改めて考察してみたい。

〈句意の解釈〉

一句または、二句、四句全体の意味を解釈するもの。

○卷二、張衡「西京賦」の「若歷世而長存、何遽營乎陵墓」の注（12 b）

言若歷代而不死、何急營於陵墓乎。

○卷三〇、謝靈運「石門新宮所住四面高山迴溪石瀨脩竹茂林詩」の「崖傾光難留、林深響易奔。感往慮有復、理來情無存」の注（8 a）

言悲感已往、而天壽紛錯、故慮有迴復。妙理若來、而物我俱喪、故情無所存。（集注本卷五九上29 a。已作若。）

○卷三〇、謝朓「觀朝雨」の「方同戰勝者、去翦北山萊」の注（14 a）

言隱勝仕也。（集注本卷五九下11 b）

この句意を解釈する場合は、駢文によって行う例が散見する。たとえば、

○卷四〇、楊脩「荅臨淄侯牋」（集注本卷七九39 b）の「若仲宣之擅漢表、陳氏之跨冀域、徐劉之顯青豫、應生之發魏國、斯皆然矣」の注（14 a）

仲宣流寓楚壤、故云漢表。孔璋窘身袁氏、故云冀域。偉長淹留高密、故云青也。公幹淪飄許京、故云豫。德璉時居汝潁、汝潁太祖食邑、故云魏也。

と、謝靈運「擬魏太子鄴中集詩」（『文選』卷三〇）の語を使いながら六字句を作って注釈する。その関係は次のようになる。

謝靈運「擬魏太子鄴中集詩」

「荅臨淄侯牋」李善注

（王粲、字仲宣）序 遭亂流寓、自傷情多

仲宣流寓楚壤、故云漢表。

整裝辭秦川、秣馬赴楚壤。

（陳琳、字孔璋）董氏淪關西、袁家擁河北

孔璋。蒼身。袁氏、故云冀域。

單民易周章、窘身就羈勒。

（徐幹、字偉長）置酒飲膠東、淹留憩高密。

偉長淹留高密、故云青也。

（劉楨、字公幹）河兗當衝要、淪飄薄許京。

公幹淪飄許京、故云豫。

（應璩、字德璩）序汝穎之士。

德璩時居汝穎、汝穎太祖食邑、故云魏也。

中でも、徐幹と劉楨については、「淹留憩高密」（淹留して高密に憩へり）、「淪飄薄許京」（淪飄して許京に薄れり）の句をほぼそのまま使用している。ただ、徐幹についての「淹留憩高密」（高密に淹留す）の方は、「憩」字がなくとも意が通じるのだが、劉楨に関する「淪飄許京」は、「薄」字を取り去って「許京に淪飄す」と読むと、「水に漂うようにして許の都に着いた」という原意が取りにくくなる。李善は、原意は周知のこととして注釈文の中で、その駢文創作の才を発揮しようとしているのである。

〈比喻の指摘〉

○卷二四、曹植「贈徐幹」の「寶棄怨何人、和氏有其愆」の注（2 b）

寶、以喻幹、和氏、喻知己也。（集注本卷四七4 b）

この後に、『韓非子』和氏篇を引いて、「寶」と「和氏」の典拠を挙げる。

○卷二四、潘尼「贈陸機出爲吳王郎中令」の「予涉素秋、子登青春」の注（26 b）

素秋、喻老。青春、喻少也。（集注本卷四八下23 b）

この後に、「劉楨與臨淄侯書曰、肅以素秋則落。楚辭曰、青春爰謝」と、それぞれの語の引証を行っている。

○卷二四、潘岳「爲賈謐作贈陸機」の「婉婉長離」の注（24 a）

長離、喻機也。(集注本卷四八下20 a)

「長離」が陸機を例えたものと指摘した後で、「婉婉」の典拠として『楚辭』離騷(遠遊篇にも見える)を引き、「長離」には、『漢書』郊祀歌天地と臣瓚の注を引いて靈鳥であることを示す。

○卷三〇、謝朓「和王著作八公山」の「長虵固能翦、奔鯨自此曝」の注(17 b)

長虵、喻融。奔鯨、喻堅。(集注本卷五九下25 a)

融は王融、堅は苻堅のことという。

この比喩の指摘は、卷二十三から卷二十六の贈答詩についての注に頻出する。贈答詩には比喩表現が多いことが、李善注によっても知られる。

#### 〈音注〉

○卷二、張衡「西京賦」の「消雰埃於中宸」の注(10 a)

雰音氛。宸音辰。

直音による注。永隆本には「雰音氛」の三字は無い。また、「宸」を「宸」に作るが、これは筆写の誤りであろう。

○卷二、張衡「西京賦」の「駁姿駘盪、熏鼻桔桀。杓詣承光、睽窳摩繕」の注(10 b)

熏、徒到切。鼻、五告切。桔音吉。睽、呼圭切。窳、計狐切。摩、呼交切。

反切による注。この箇所の李善注は珍しく音注のみである。永隆本は、「切」を全て「反」に作る。また、「告」を「到」に作り、「吉」の下に「桀反」の二字が有り、「狐」を「孤」に作る。

ただ、板本李善注にある音注には、集注本に無いものが多く、集注本所収の「音決」と同じものもあり、後人による増補と思われる注が多いので、安易に李善の音注とみなすことはできない。たとえば、卷三十の胡刻本には、音注が十五条(内、一条は集注本が欠落しているので検証不能)記載されているが、該当する集注本卷五十九上、下の李

善注にも見られるのは、わずかに次の一例のみである。

○卷三〇、謝朓「郡内登望」の「恂恂魂屢遷」の注(14 b)

楚辭曰、怵怵而永懷。怵、勅驕切。(集注本卷五九下13 b)

それも正文の字ではなく、引用した『楚辭』遠遊の字への音注である。板本には、まだこの下に「恂、況壤切。恂、況往切」の音注があるが、集注本には無い。

以上の義例は、間々李善注独自の部分も見られるが、他の注釈書とも共通点が多く、『文選』李善注特有の釈義の注とは言い難い。やはり李善の釈義の注は、以下の例のように引書引文と結びついた時と、詩人たちが如何に文学言語を創作しているのかを説明する時にその特質が見えてくるようである。

#### 〈引書するための釈義の注〉

正文と同じ言葉が典拠とすべき文献に見られない場合に、釈義によって言葉を置き換えてから引書引文を行う。これは、斯波博士の引文義例考の「(二) 釈義(一) 語義を解く為の引文(ロ) 先づ正文の甲の語を解して、然る後乙の語の用例を示す場合がある」に相当するものである。

○卷二十四、曹植「贈徐幹」の「圓景光未滿」の注(2 a)

圓景、月也。

論衡曰、日月之體、狀如正圓。鄭玄毛詩箋曰、景、明也。釋名曰、望、月滿之名也。(集注本卷四七1 b)

「圓景」は、他に例がなく曹植の創作した文学言語と判断したのであろう。月の意だと釈義しておいて、『論衡』説日篇、『毛詩』小雅車輦「景行行止」の鄭玄箋、『釈名』釈天篇を引用して説明している。

○卷二十八、鮑照「白頭吟」の「直如朱絲繩」の注(21 b)

朱絲、朱紱也。

禮記、清廟之瑟、朱絃而疏越。（集注本卷五六18a）

正文の「朱絲」が、単なる赤い糸ではなく、清浄な場である祖先をまつる廟で使用される琴に張られた弦の意であることをいうために、「朱絃」に置き換えておいて、『礼記』樂記をその典拠として挙げている。これによって、後ろの「清如玉壺冰」（清きこと玉壺の水の如し）と対になっている「直きこと朱絲の繩の如し」という正文の「直」の意がよくわかるのである。

○卷三十、謝惠連「七月七日夜詠牛女」の「傾河易迴幹」の注（5a）

傾河、天漢也。

陸機擬古詩曰、天漢東南傾。（集注本卷五九上14a）

「傾河」は、「天漢」の意とした上で、「天漢」と「傾」が併せ出てくる陸機の「擬古詩」（『文選』卷三十）を典拠として引用している。これによって、謝惠連が陸機の詩をもとに「傾河」という言葉を創作したと李善が判断したことがわかる。

○卷三一、袁淑「効曹子建樂府白馬篇」の「義分明於霜」の注（2a）

義分、則分義也。

孫卿子曰、禮樂則脩、分義則明。（集注本卷六一上3a）

正文の「義分」を「分義」に置き換えて、その典拠となる『荀子』彊國篇を引用する。

○卷三四、曹植「七啓」の「珠翠之珍」の注（16a）

珠翠、珠柱也。

南方異物志曰、採珠人、以珠柱肉作鮓。（集注本卷六八11a。胡刻本脱柱字。鮓下有也字。）

○卷三四、曹植「七啓」の「蟬翼之割」の注（16a）

蟬翼、言薄也。

楚辭曰、蟬翼爲重。(集注本卷六八11a。胡刻本重下衍也字。)

「蟬翼」の典拠として、『楚辭』卜居をそのまま挙げると正文の意味に誤解を生じる恐れがあるので、まずここでの意味を説明しておいた上で引書している。

また、言葉の意味を説明した後、正文と似た言葉のある文を引証として挙げる場合がある。

○卷二八、鮑照「升天行」の「解玉飲椒庭」の注(24a)

椒庭、取其芬香也。

洛神賦曰、踐椒塗之郁烈。(集注本卷五六26a)

「椒庭」の典拠が無いので、「其の芬香を取るなり」と説明した後で、似た言葉「椒塗」が用いられている曹植の「洛神賦」の一句を引く。

これらは、釈義さえすれば事足りるのかもしれない。しかし、李善は、「作者必ず祖述する所有る」という執念にも似た典拠へのこだわりを見せている。おかげで我々は李善の注を通して詩人たちが如何に文学言語を創作していったかが理解できるのである。

〈引書の後に説明を付ける〉

○卷三〇、謝朓「始出尚書省」の「青精翼紫軼」の注(12a)

春秋元命苞曰、殷紂之時、五星聚房。房者、蒼神之精、周據而興。然青卽蒼也。(集注本卷五九下4a。胡刻本此下有齊木德故蒼精翼之孔安國尚書傳曰翼輔也十八字。)

正文の「青精」が、『春秋元命苞』に引く「蒼神之精」だというのが、「青」と「蒼」と字が違うので、説明を付け加えたものである。李善が引書の後に説明を付ける時は、このように、「然」字を冠するのが通例である。また、

次のように引書の後で字句の異同を指摘する場合もある。

○卷三〇、沈約「応王中丞思遠詠月」の「網軒映珠綴、應門照綠苔」の注(20b)

楚辭曰、網戸朱綴刻方連。下云、綠苔。此當爲朱綴。今並爲珠。疑傳寫之誤。(集注本卷五九下35b)

『楚辭』招魂を引証として挙げた後、正文の「珠綴」は、下文の「綠苔」と対になるので「朱綴」に作るべきだという。ただ李善の見た諸本は皆「珠綴」になっていたので、伝写の誤りだろうと指摘する。このように、李善は時々『文選』諸本や『漢書』などの同じ作品が収録されている書物との校勘を記している。これらの注記からも、李善の引文に対する厳格な注釈態度と詩人が創作した正文の言葉へのこだわりが見て取れる。

〈正文の表現が如何なる意味をもつて作られたかを説明する〉

○卷二四、陸機「贈馮文熊」の「佇立望朔塗」の注(22b)

馮在斥丘、故云朔塗。(集注本卷四八下4b)

「朔塗」という典拠のない言葉がどういう意味で作られたのかを説明している。

○卷三〇、鮑照「翫月城西門解中」の「歸華先委露、別葉早辭風」の注(11a)

言歸華先委、爲露所墮、別葉早辭、爲風所隕。華落向本、故曰歸。葉下離枝、故曰別。(集注本卷五九上37b)

爲露作由、墮作墜。胡刻本「故曰歸」作「故曰歸本」、「故曰別」作「故曰別葉」。「本」「葉」兩字疑衍。今從集注本改。

正文の「歸」と「別」がそれぞれ「華」と「葉」を修飾するという表現は、他に例を見ない鮑照独自の文学言語の創作であり、李善は、その意味を「華は落ちて本に向かふ、故に帰と曰ふ。葉は下ちて枝を離る、故に別と曰ふ」と説明しているのである。

○卷三〇、鮑照「翫月城西門解中」の「蜀琴抽白雪」の注(11a)



相如工琴而處蜀、故曰蜀琴。(集注本卷五九上 38 b)

この「蜀琴」という語も鮑照独自の文学言語の創作であるので、李善は、司馬相如が琴に巧みで蜀の地にいたので、「蜀琴」というのだと説明する。この創作された文学言語の意味を説明する場合は、「故曰」という言い方が使用されることが多い。

本稿では、永隆本の残存する巻二張衡「西京賦」と詩を収める集注本卷四七、四八、五六、五九、六一、六二及び造語が多いと思われる曹植「七啓」を収める卷六八を中心、李善の釈義の注の義例を整理してみたが、それらは当然『文選』全巻の李善注にわたって見られるものである。また、この他にも、修辭用語を使用した注釈が見られるが、これについては、既に述べたのでここでは省略した。

以上、釈義の注について考察した結果、李善は引書の前後に説明を加えて作者の言語表現の典拠を探ろうとしているなど、本文の意味を解釈する以外にも、文学言語創作の解明に意を注いでいることが明らかになった。これは、引書引文による注釈に見られる態度と同じである。川合康三氏は、唐代の文学への『文選』の影響について、「唐代の文学は、六朝末期の文学の継承と、それへの反撥から出発し、新しい詩の様式を確立する方向へ向かって発展していった。詩体の面においては、周知の如く、近代定型詩の形式に向かった。語彙のレヴェルでは、詩語の定着に向かい、それはおそらく『文選』の規範化と対応する」と指摘される<sup>1)</sup>。唐代において、『文選』が詩文創作の最も重要な参考文献になり、詩語の定着が『文選』の規範化によってなされたことに對する李善注の役割は極めて大きい。それは、李善注によって、『文選』の所収の作品の作者たちが古典の言葉を利用して如何なる文学表現をしたのかを追究することができ、李善注が古典と『文選』所収の作品の言語表現を繋ぐ役割を果たしているからである。

- 注
- 1 拙稿「李善伝記考」(『広島大学文学部紀要』第五六巻、一九九六年) 参照。
- 2 吉川幸次郎氏は、「杜甫は『文選』を、李善の注釈をもふくめて、あたかも囊中に物をさぐるごとく暗記していたと、推測してまちがいないと思う資料を、今日くわしく申すひまがありませんが、私はもっております。」(『杜甫の詩論と詩』—京都大学文学部最終講義— 筑摩書房『吉川幸次郎全集』一二)と言われる。
- 3 茶陵本・四部叢刊本の校語及び九条本の旁記には、李善本にはこの二句が無いと記されているが、胡氏考異に「案、善魏都賦注引西京賦曰、皇恩溥。似無者但傳寫脫」と指摘するように、この句は巻六「魏都賦」の李善注に引かれているので、李善本にはもともとと有り、茶陵本・四部叢刊本編集の際に見た李善本が脱していたと考えられる。因みに、袁本・足利本・朝鮮本にはそのような校語はない。
- 4 『文選雜識』第一冊(第一学習社、一九八一年)。
- 5 胡刻本「傲」作「傲」、注同。今從尤本改。集注本作「敖」。
- 6 邊氏『晋詩』卷一では、『初学記』の引用する「遊仙詩」とは別に、『文選』李善注のこの箇所も「嘯噉遺俗羅、得此生」として引き、「邊案、得此生上當脫二字」と記す。これも集注本を見れば解決する問題である。
- 7 「鈔」は作者陶淵明自身のことをいうとして「此自喻也」と注す。
- 8 森野繁夫・富永一登「文選集注所引「鈔」について」(『日本中国学会報』第二九集、一九七七年) 参照。
- 9 胡刻本悞誤作招。今從集注本改。集注本悞作傲、切作反。
- 10 拙稿「『文選』李善注に見られる修辭用語について」(『中国中世文学研究』第二五号、一九九四年)。
- 11 「奇—中唐における文学言語の規範の逸脱—」(『東北大学文学部研究年報』第三〇号、一九八〇年)。

## 关于《文选》李善注考 —— “释义之注”

富 永 一 登

众所周知，唐代李善的《文选》注虽是以引证注释为本，但其中不依据引证的“释义之注”也是随处可见的。基于此，本文通过对“释义之注”的试析，从而究明了“释义之注”的特征。

作为结论而言，李善在引证过程中附诸说明以此考察作者遣词造句的出典等，不仅解释原文的意义，而且注重详解了其文学语言创作上的特点。由此可见，这与李善引证注释的态度是相同的。

在唐代，《文选》能够成为诗文创作中重要的参考文献是与李善注所产生的极大作用分不开的。可以说，透过李善注能够窥测到为《文选》所录的作者们在引用古典词汇上是如何丰富其文学表达的轨迹。这是因为李善注起到了在将古典与《文学》所收作品中的词汇表达相联上的重要作用。